教授への質問	教授ご回答	大学院生　名古屋大学法学研究科 総合法政専攻（刑事訴訟法）への質問	大学院生　名古屋大学法学研究科 総合法政専攻（刑事訴訟法）ご回答	大学院生　名古屋大学法学研究科 総合法政専攻（政治学・政治理論）への質問	大学院生　名古屋大学法学研究科 総合法政専攻（政治学・政治理論）ご回答
研究者の道を選ばれたきっかけや決め手は何ですか。	はじめから、明確な決め手や目的意識があったわけではありませんが、もともと文学部志望で思想や哲学、歴史に興味があり、何となくもう少し学問を続けてみたいと思って、大学院への進学を決めました。 段々と研究を続けていくうちにいろいろな壁にぶつかりながら、一歩ずつなぜ自分は学問がしたいのか、なぜ学問を種に生きていきたいのか、そういったことが徐々に自覚をされていったというのが正直なところで、いまでは学者という職業は、ある種自分にとって転職であったと思っています。人生というのは、見透しがつかない中で先へ進まねばならない面が多々あると思いますので、何か興味があるものや気になることがあったら、思いうちは飛びこんでみる勇気をもつことが大事なのではないかと思います。	学部(①民間・公務員、②法学研究科、③法科大学院、④博士進学（研究者）、⑤就職）の割合はそれぞれどのくらいですか（体感で構いません）。	学部では①が5～6割程度、②は1割以下、ロースクールが4割ほどのように感じます。④は数人程度です。⑤については①との違いがわからないので省略します。	研究において終了や結論はありますか。	研究自体には終わりはありませんが、区切りはあると思います。 研究は多くの場合「論文を書くこと」なのですが、論文には字数や締め切りといった制限があるので、すべての問題を解決することはできません（例えば、「2万字以内」など）。 残りの研究課題は、別の論文で取り組むことになります。 修士課程（2年間）の場合は修士論文、博士課程（3年間）の場合は博士論文を完成させることが一つの区切りです。
なぜ比較政治思想に取り組もうと思ったのですか。	もともとヨーロッパやアメリカの政治思想史を研究していましたが、大学院での研究をしているうちに、西洋から輸入された大学で科学や研究だけを中心としている生活に対して徐々に疑問を感じていようになりました。それと同時にまた神々で下宿を始めて仏教の世界にまずは触れることで、自分の研究分野が、自分が東アジアの日本で生きているにもかかわらず、欧米の思想家だけを特権的、優先的に扱っているだけよいのかという問題意識も同時に生まれてきました。その学問的限界を克服しなければいけないという自分の問いかけに応答しうる分野として、そこに比較政治思想があったというのが、端的にいうと答えになるでしょうか。	法学を学ぶ時、高校生の内から知っておいたりすると良いことはありますか。	高校生のうちから法律の条文や内容について詳しく知っておく必要は全くないと思います。ただ、世の中の流れやニュースについて一般知識程度は知っておくと関連いなく勉強しやすくなります。なぜなら法律とはすなわち世の中の秩序を維持し、問題を解決するために存在しているからです。いざ法学部で法律の勉強を始めた際、「この規定がなんの役に立つのか、なんのために存在しているのか？」という疑問に答えられるようになるだけでイメージしやすくなり、その法律の規定を理解しやすくなると思います。	「政治」がどのように行われるべきかを明らかにするためにも研究していると仰っていましたが、実際に自分が政治家などになって研究したことを実行したいと思わないですか。	自分自身が政治家になることはあまり考えていません。というのも、政治家は選挙制度などの既存のルールの中で問う必要がありますが、私はそのような既存のルール自体が正しいのかどうかに関心があるからです。 制度やルールが正しいかどうか、どのように機能しているのかといったことを調べるためには、政治学者として研究を行うことが適していると、と考えました。
		法学を学んで良かったと思うことはありますか。	端的に答えると、「世の中の動きを政治や司法の観点から考える事ができるようになったこと」です。社会の中で司法が問題になるのは多く判決の時です。「どうして裁判官はあんな判決を出したのか？」というような疑問を抱いたことが誰しも有るかと思いますが、それにはちゃんと理由があるのです。もちろんそれが妥当かどうかは議論の余地があります。でも少なくとも、その理由がなんなのかということについて自分で考えることができるようになりました。政治についても同様のことが言えます。多くの人が疑問のままにしている事について考えるきっかけを得ることができるというのが、法学部で学んでいて良いことかなと思います。		